



PHOTO: ISA/Sean Evans

サーフィン・カルチャーを丸ごと楽しむ

— オリンピックの新たな観戦スタイルを目指して

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会

サーフィン・スポーツマネージャー

井本公文
きみふみ



東京2020大会から新たなオリンピック競技として登場するサーフィン。波と一体となって選手が繰り広げる空中技のダイナミックさ、天候に左右されながらの選手同士の駆け引きなど、採点競技としての面白さはもちろん、サーフィンが長年培ってきた音楽や文化、会場となる海や自然環境、併設のフェスティバルを同時に楽しむという観戦スタイルも魅力だ。新たな時代のオリンピックを印象付けるサーフィンの多様性とその楽しみ方について伺った。

サーフィンは、米国・南米・オセアニアをはじめ世界中で長く愛されてきたスポーツで、世界のサーフィン人口は3500万人を超えるといわれます。昨年の世界チャンピオンを輩出したブラジルでは、サッカーの次に人気がありますし、米国カルフォルニア州で毎年開催されるUSオープンには、100万人超の観客が訪れます。

日本におけるサーフィンの歴史は意外と古く、約60年になります。幾度かのサーフィンブームを経て、サーフィン・カルチャーが浸透していくなか、少しずつ競技志向へと移行し、この20年ぐらいで大きく様変わりしました。サーフィン・カルチャーの洗礼を受けた世代のジュニアたちが頭角を現してきたことで、日本のサーフィン競技も年々強くなっています。サーフィン人口も順調に増え、現在の日本は、3度目のサーフィンブームの最中だといえます。

技のダイナミックさや波を乗り分ける選手の駆け引きに「喜」憂

サーフィンは採点競技であり、1ヒート(20〜30分)の競技時間

に、2〜4人の選手が同時に海のなかに入り、波に乗って演技し得点を競います。その間は何本の波に乗ってもよく、互いにけん制しながら、良い波、自分の得意な波を選んで演技を披露します。波の大きさ、技のスピードや力強さなど演技の表現力が10点満点で評価され、高得点を取った2本の演技の合計点を競います。体操やフィギュアスケートなどの採点競技を思い浮かべると、わかりやすいかもしれません。1ヒート中、基本的には、上位2名が次の対戦へと進み、2回戦、3回戦と続くトーナメント方式です。

観戦にあたり、まず着目していただきたいのは、ライディングの美しさやダイナミックさです。次に、選手同士の駆け引き。この波に誰を行かせるのか。次の波は自分が狙う。そんな心理戦が練り広げられています。干潮や満潮などの潮の状態によっても波が変わるので、事前にコーチが指示を出すこともあります。しっかり戦略を練って海に入ったはずが、なにぶん自然が相手なので、なかなか指示どおりの状態にならず、選手もコーチもオロオロ、応援している選手のそんな状況に観客としてもヤキモキする。それもまた、観戦の楽しみ方の1つといえます。

採点競技だと、判定やルールが複雑なのは、と心配されるかもしれませんが、わりとすぐに競技としての面白さは理解できると思います。一昨年、宮崎県日向市で行われた世界ジュニア選手権には、サーフィン競技の観戦が初めて、といった近所の年配の方が足しげく通ってくれました。ある日、「あの波よかったね。楽しくて毎日来ているんだ」と、われわれスタッフに声をかけてくれました。意外に思うかもしれませんが、そのくらい親しみやすい競技ですし、その面白さは容易にわかるようになるのです。今年の9月、宮崎で行われる世界選手権には、世界のトップ選手が集まります。まさにオリンピックの前哨戦となることが予想さ

れます。

近年、日本人選手は若手を中心に層が厚くなってきており、今回の東京大会では、かなりの活躍が期待できます。体格や自然環境の違いもあり、大きな波は海外の選手が得意とするところが、器用な日本人選手はいろいろな波に対応できます。波の上で練り広げられる技に関しても、日本人の技は芸術性が高く、その技術的な要素への評価も高いといわれています。日本選手が上位に食い込むためには、いかに技の精巧さや力強さで得点を積み重ねていけるかがカギとなるでしょう。こうした見どころを見逃さないよう、各選手の演技を大きなスクリーンで繰り返し流し、ライブ中継による解説も検討するなど、東京大会のサーフィン競技は、よりわかりやすさ、親しみやすさを追求していきたいと思っています。

自然環境や文化を丸ごと楽しむ観戦スタイル

オリンピックの競技運営の視点から見ると、サーフインは自然環境に左右されるので、観戦スタイルにも新たな組み立てが必要になります。海の素晴らしさがあり、オープンスペースな自然のなかで行われている競技を観戦するということは、従来のオリンピック観戦と異なり、新鮮で、なかなか壮観なものがあります。しかしながら、その日その時に波が来るかどうかは、神のみぞ知ると言ったら大袈裟ですが、悪天候や波の状況で競技が延期されることもあり得ます。競技はなかったけれど、十分に楽しむことができた、満足して帰ってもらえるような、そんな新たな取り組みを検討しています。

具体的にはサーフィン競技の会場内で「サーフィンフェスティバル」を開催するという計画です。サーフィン競技会場には、競

技だけでなく、音楽フェスのようにステージがあつて、サーフィン・カルチャーから派生した音楽「サーフミュージック」、オーガニックフード、サーフファッションがある。そんな空間が演出できればと考えています。

良い波を待つ間、サーフ・アスリートがギターを奏でたのがサーフミュージックの発祥といわれており、サーフィンと音楽は切っても切り離せないものです。

「スポーツの祭典」として知られるオリンピックですが、「文化の祭典」という側面も持っています。オリンピック憲章でうたわれている「スポーツを文化、教育と融合させること」とサーフィン・カルチャーには、共通点が多いと私は考えています。サーファーが自然とのつながり、海とのつながりを大事にするということはよく知られています。彼らが海から感じるものが、音楽、ファッションやアートに大きく影響を与え、発展してきています。サーファーが海からたくさんのお話を学ぶように、サーフィン競技を観戦する観客の方々にもそのマインドを感じてもらいたいと思います。今回初めて追加されたサーフィン競技は、文化(カルチャー)や教育(学びの機会)の融合を体感できるまれなスポーツかもしれません。

こうした運営スタイルは、国際大会などでは定着していますが、オリンピックという場では異色です。これまでのスポーツの概念にとらわれない、観戦する側にもちょっとした発想の転換が必要なのかもしれません。タイムや点数を競うだけの世界から、より幅広い多様性のある競技へ変化して広がってきたというこれまでの経緯も理解していただきながら、会場でサーフィン・カルチャー独特の雰囲気存分に味わっていただきたい。基本、観戦スタイルは自由で、ルールさえ守れば、場所の移動や飲食なども自由です。

しかしながらセキュリティに万全を期すオリンピックでは、うはいきません。オリンピックルールを守り、セキュリティなどの最低限の規制とのバランスが、難しさであり、今後の競技運営の工夫のしどころでもあります。

多様性の享受が サーフィンの根強い人気につながっている

サーフィンの人気は、サーフィンカルチャーを生む土壌や、多様性が認められるその環境にもあるのではないのでしょうか。サーフィン人口は今も世代を超えて広がっていますし、全日本選手権では、最高齢77歳の方が出場したり、最年少6歳の子の活躍も見られたりします。

少し話はそれるかもしれませんが、今回のオリンピック会場である千葉県一宮町周辺には、平日は都内で働き、週末はサーフィンをするライフスタイルの方々が多いのですが、その働き方の多様化が進むにつれて、徐々に移住するなど、周辺には珍しく人口増という現象が見られるのも面白いところです。サーフィンという競技が、スポーツという枠を飛び越えて、人の生き方そのものに影響を与えているということがよくわかる好例だと思います。

一宮町以外でも、サーフポイントを持つ地域では、サーフィンを核に地域活性化を図るサーフタウン構想を進め、移住を自治体が後押しする仕組みもできてきています。時間をかけて成熟してきた日本のサーフィン・カルチャーがいよいよ定着する。東京大会でデビューするサーフィン競技が、そうした流れに良い影響を与えられたらうれしいですね。

(取材日：2019年5月9日)